

研究ノート

# コミュニケーション重視の英語教育における言語の役割とは

「言語の限界」に対する理論的考察

What is the Role of Language in Communication-oriented English Education?

A theoretical consideration on the 'limitation of linguistic media in communication'

山中 司 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程

Tsukasa Yamanaka / Doctoral Program, Graduate School of Media and Governance,  
Keio University

鈴木 佑治 慶應義塾大学環境情報学部教授

Yuji Suzuki / Professor, Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

---

「コミュニケーション重視」の大学英語教育に対する社会からの期待が高まる一方で、既存の理論フレームワークは言語至上主義的なモデルに傾倒している等、必ずしも十分な「コミュニケーション観」に基づいた評価ができていない。このような問題意識を背景に、これからの英語教育が立脚すべき「次世代コミュニケーション論」を素描し、示唆と試論を提示した。この論考は「言語の限界」を複数の観点から理論的に明らかにし、メタ・コミュニケーションレベルでの分析が、広義のコミュニケーション論の概念化には不可欠なことを論じている。

This paper proposes a new theory of communication incorporating next generation media and its application to English education at the university level. Recently in Japan, need for so-called communicative English education is growing stronger, in correspondence with which there have been some interesting theories of communication. However, such theories are far from being functionally adequate, because they are confined to language alone without realizing the limitation of the role of language in communication. This paper attempts to correct these existing theoretical frameworks for a more functional model of communication. There are several important issues highlighted in this paper including "meta-communicative dimension", which is considered essential for the conceptualization of communication thus defined.

Keywords: 大学英語教育、コミュニケーション、次世代コミュニケーション論、言語の限界、メタ・コミュニケーション

## 1 はじめに

英語やコミュニケーションへの関心を背景に、昨今の日本の大学の英語教育は、その多くが「コミュニケーションを重視」したものを目指そうと、各大学独自に様々な改革に取り組みつつある。一昔前の受信一辺倒の授業を、発信型の、学生とのインタラクションをより重視したものに取って代えることを目指し、例えば慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) の英語プログラムのように、「発信型大学英語」の目標のもと、次世代のメディア環境を縦横に駆使した英語教育を 15 年以上にもわたって実践してきたような先駆的な事例もある (鈴木孝夫 1999, 鈴木佑治 2003)。また多くの大学で、学生の主体的な活動が評価の大部分を占めるプロジェクト授業、スピーキングやプレゼンテーションを中心とした科目も導入されつつあり、こうした傾向は今のところ衰える気配はない。

しかしながらその一方で、そうした英語授業における「コミュニケーション能力」という概念についての理解、さらには、それをどう評価したらよいのかという点に関して、ほとんど合意が見られないのが実情である<sup>1</sup>。理論的にも社会言語学や応用言語学の分野で、多くの議論やモデルの提案が行われてきたが (Canale and Swain 1980, Bachman 1990, McNamara 1996 等)、それらの中でも統一的な見解は見られず、また抽象的な次元にとどまっているのが現状である (金谷他編 2003)。

筆者はこれまでコミュニケーションを重視した大学英語教育における評価の問題を研究してきた (山中 2006)。しかしながらその過程で常に課題となっていたのが、「コミュニケーション」という事象を適切に捉えることができる有効な理論の欠如であり、既存の「コミュニケーション能力」論の概念的な狭さである。「言語至上主義」という欧米特有の考え方は、その最たるものとして一貫して批判され続けてきた点である (石井 2001, 柳瀬 2001: 草稿)。すなわち、Hymes (1967, 1972) をはじめとした社会言語学のパラダイムでさえも、コミュニケーションを (暗黙裡に) 「言語コミュニケーション」と規定し、あくまで言語を (支配的に) 用いたコミュニケー

ションを想定していることを指す。実際の「コミュニケーション」は、「非言語」、「ノンバーバル」な要素がその多くを占め、言語以上に重要なメディアであることが多くの研究から明らかにされているにもかかわらずである<sup>2</sup>。

実際のコミュニケーションが言語を用いつつも、言語だけでは行われないことは明らかである。若者を中心とした表現メディアは、視覚的、聴覚的、触覚的なメディアをはじめ、言語以外の表現手段に、むしろ多くのコノテーションを含ませながら豊かな表現を確立している。そうであるならば、コミュニケーション重視の授業が「言語メディア」だけを評価するのは十分ではないであろう。

本論考は、実際のコミュニケーションにおける「言語の限界」を取り上げ、この論点に対して理論的な説明を試みる。さらにこの議論を踏まえた上で、これからの「次世代コミュニケーション論」が、言語をその一部に含めたコミュニケーションをどのようにとらえ分析することが適切か、そのモデルの理論化を試みる。こうして既存の言語コミュニケーション論の問題点とその限界、新たな貢献の方針を示すことで、有効な英語教育理論への示唆を与えることが本論考の最終的な目的である。

また本論考が主張する「言語の限界」とは、単に「言語メディア」に対する「非言語メディア」の存在をクローズアップするような類のものではないことはここで強調しておきたい。本論考が最終的に試論として提示する分析の枠組みは、変貌する次世代メディア環境のインパクトを想定し、日本の英語教育におけるコミュニケーションの概念、言語メディアの相対的役割(の変容)等の論点を整理した上で、メタ・コミュニケーションレベルでのそれらの質的な「違い」を説明している。これは、「言語的領域」と「非言語的領域」が実際の領域のみでなく、メタレベルにおいてもその領域を異にし、同じ枠組みの中では説明ができないことを概念的に明らかにしたことになる。こうした根本的な理論的検討から英語教育、ひいては言語教育を考えることは、これまで海外を含め、ほとんど行われていない。

## 2 再考：コミュニケーションにおける言語の役割

米国の言語哲学者の一人に Davidson<sup>3</sup> がいる。Davidson は Quine<sup>4</sup> からの教えを批判的に引き継ぎながらも独自の言語哲学を展開し、「言語」そのものの限界をラディカルに議論したことで知られている。Davidson の論考は(第二)言語コミュニケーションや言語教育にとどまることなく、コミュニケーションそのもの、そして日常言語の生の営みに対して深い洞察を与えるものであり、本論考にとっても極めて示唆的である。

Davidson (1984, 1986) は Quine の「翻訳の不確定性」を肯定しながらも、「それでもコミュニケーションが成立する」現実に着目する。意図的に間接的な含みを伴った発話の解釈等も含め、我々の日常のコミュニケーションは、たとえ個々に最終的な「不確定性 (indeterminacy)」が残ったとしても、通常我々は不自由しない範囲で意思疎通を行っている。そして Davidson が特に強調する点として、言語コミュニケーションがしばしば「言い間違い (malapropism)」を含むにもかかわらず、多くの場合にコミュニケーションとして成り立つことであり、これは我々の日常のやりとりの本質に迫る議論として興味深い。Davidson は、この現象はむしろ「どこにでもある (ubiquitous)」現象であると主張する。

「言い間違いを含むにも関わらずコミュニケーションは成立する」という指摘は、第二言語を使用するコミュニケーションを考えた場合さらに興味深い指摘となる<sup>5</sup>。語彙の取り違いや文法の間違い、不十分な発話や、文化的な知識・経験のなさから、第二言語コミュニケーションで不完全な発話がなされるのは日常茶飯事である。「自分の外国語が流暢でもなければ、言いたいことを言い尽くしたわけでもない。しかしおそらく意図は伝わった」という経験は、多くの外国語学習者が実際のコミュニケーションを経る中で共通して感じることはないか。

この前提をもとに議論を進めるならば、発話の受け手 (= 解釈者) は、時として発話者の「文字通りの意味 (literal meaning)」と、発話者の「真の意味 (Davidson はこれを「第一の意味 (first meaning)」と呼ぶ)」とが一致しな

い場合、必要とあらば「文字通りの意味」の字義的な解釈を改竄してまでも発話者の「第一の意味」を何とかして「正しく」解釈しようとするのが、言語コミュニケーション成立のためには必要不可欠なことになる。さらに言い間違いに関して事象は単純にパターン化できない。例えば発話者 A は、「arrangement を derangement と言い間違える (Davidson 1984)、受動文と能動文を取り違える傾向にある」といったような一定のパターンがあると (解釈者 B が) みなし、そのパターンが常に再帰的 (recursive) に適用できるかといえば、そうではないのである。Quine (1960) が指摘するように、一定の (保守的な)「発話傾向」が見られることは確かかもしれない。しかし「状況」は、発話者個人内においてでさえ、常に動的 (dynamic) に作り変えられ、「意味」とはその場、その時だけで、「当座的 (暫定的)」に成立することを Davidson は明らかにするのである<sup>6</sup>。

Davidson は現実世界の言語コミュニケーションが、「当座理論 (passing theory)」によって遂行され、ある発話に対して、解釈者がその都度暫定的に意味を解釈しながら成立することを論じた。だからこそ言い間違いを含むにもかかわらずコミュニケーションが成立するのであり、明らかに言葉足らずであっても、また「翻訳の不確定性」の指摘が成り立つとしても、それを乗り越えて「分かり合える」という経験が持てるのである。これはどのような言語間においても「根源的解釈 (radical interpretation)」が働くであろうとする Davidson 独自の前提に拠るもの<sup>7</sup>であり、言語コミュニケーションが「言語知識 (linguistic competence)」をその一つとしつつも、それ以外の要素が大きく作用することを指摘した点で、コミュニケーションのメカニズムの新たな解釈に一石を投じている。これは言語をその一部とした広義のコミュニケーション論を前提としており、本論考にとっても示唆的である。Davidson (1986: 445) も「この解釈を真面目に受け入れるならば」と前置きをした上で、自らの主張が大いに物議を醸し出す可能性を認め、以下のように明言している。「私たちは、言語という通常抱く観念を捨て去っただけでなく、言語を知ることと、この世の中でおしなべてうまくやっていくことを知ることとの間の境界線すらも、消し去ってしまったことを自

覚すべきなのである」。

こうした Davidson によってなされたコミュニケーションにおける「言語の死亡宣告」(戸田山 2002)は、後に Chomsky (2000)をはじめ、多くの論考で取り上げられることとなる。本研究ではこの含意を英語教育の文脈で解釈し、「言語(メディア)の限界」に対する理論的インパクトが、コミュニケーション重視へとシフトする昨今の英語教育の潮流とも相俟って、相当に大きなものであり、新たなパラダイムすら示唆するものであると考えている。

ポストモダンの議論は人間の外部世界の認識におけるその「限界」を明らかにしてきた。人間は他の動物とは同じ「環境世界(Umwelt)」で生きてはいない。視覚メディアとしての人間の眼は、世界にあるほとんどの「光」に反応しない。聴覚メディアにおいてもしかり、嗅覚や触覚メディアにおいてもその限界が明らかにされてきた。そうであるならば、同様の伝達(受信・発信)メディアである「言語」はどうであろうか。言語にもそのコード(メディア)表現において限界があり、多元的・多重的なコミュニケーションのダイナモの中から、それが捉えることが可能な少数の特徴を「切り取っている」のみであり、本来のメッセージそのものからしたら、常に不十分にしか実現できていないことを自覚すべきではないだろうか。

### 3 次世代コミュニケーション論の素描：

#### メタ・コミュニケーションとしての分析枠組み

前章では、メディアの変貌にとりわけ影響を受けた次世代のコミュニケーションの変化と、それによる言語の相対的な役割変化の可能性を議論した。筆者はこの変容はコミュニケーション論研究において相当な理論的インパクトを持っており、従来の言語学理論がとらえてきた言語コミュニケーション・モデルに対してパラダイム・シフトをも迫る現象であると考えている。そしてこうした次世代を捉えたコミュニケーション理論が考える「言語」の概念のもとで、英語教育を論じていくべきであり、評価するべきであると考えている。本研究は英語教育における評価をその最終的なア

ウトプットとしているが、こうした未来における言語教育を理論的な構築から試みている点で、他の一連の評価論研究とは一線を画した独自の貢献を成している<sup>8</sup>。それでは、「次世代コミュニケーション論」とはどのようなものでありうるのか。ここでその素描を試みてみたい。

前章における議論が示唆するように、応用言語学や社会言語学、語用論をはじめとする理論家達は、コミュニケーションという実際の言語使用の場にその理論を持ち込む際、潔く「言語の限界」を認めるべきである<sup>9</sup>。そして建設的な方向性として、従来の言語内で用いてきた分析手法を「広義に」拡張させる必要があると筆者は提案したい。確かに既存の語用論等の枠組み(Grice 1989, Sperber 1994, Sperber and Wilson 1995等)が、言語コミュニケーションにおける「推論」や「関連性」、「メタ(言語的)表示」等の研究において相当な研究の蓄積を見せている。しかしながら、これらの理論をもってしても、例えば以下のような言語とコミュニケーションに関わる現象については十分な説明を施すことができない。

(1) 動物コミュニケーションにおける動物の言語「らしきもの」の使用:

イルカや霊長類が言語「らしきもの」を用いたコミュニケーション活動を行うことは周知の事実である。とりわけ興味深い例として、ボノボのカンジにおける一連の研究(Savage-Rumbaugh 他 1998)があるが、一部の言語学者(Smith 2002=2003等)は、カンジが行ったコミュニケーションに対し、その統語論的な不備を指摘するにとどまっている<sup>10</sup>。

(2) ピジン・クレオール言語におけるコミュニケーション論的「動性」の解明:

既存の言語の「逸脱」から構築されるピジン語やその母語化であるクレオール語は、特にそのピジン化の段階では、規範的な言語に比べ多くの要素が「抜け落ちる」<sup>11</sup>。しかしこうしたピジン化の現象は、そこにコミュニケーションがなされるがゆえに起きるものであり<sup>12</sup>、こうした現象、「逸脱」のパラダイムのみでは、これらのコミュニケーション論的な有用性、動性<sup>13</sup>、潜在性を説明できない<sup>14</sup>。

(3) 若者コミュニケーションや芸術活動に象徴される、多感覚的なメディアに訴えた混合表現の説明:

昨今の若者が頻繁に利用し、創生する絵文字の現象や、主語を落とすことに代表される、言語(学)的・文法的に逸脱した言語表現<sup>15</sup>。さらにはグラフィティ・ライターや暴走族が好む<sup>16</sup>「(書き言葉としての)文字」に対して、それらのコノテーション(内包; 暗示的意味)を、そのコンテキストや字義の多義的解釈に託すのではなく、コード(メディア)に託す表現のあり方。また(音楽)パレーや絵画、映画や演劇等、言語がその第一義的な表現手段から退いたコミュニケーション活動<sup>17</sup>への説明。これらに対してはいずれも言語学(や語用論)は十分な説明理論を持っていない。

これら3つの現象に共通することは、厳密な意味で「言語(学)的な」意思疎通はできていない可能性は否定できないとしても、コミュニケーションとしては「(問題なく)成り立っている」という私たちが通常抱く感覚である。従来の言語学やその付随理論は、表出された言語事象がコミュニケーションの第一義的要素として存在して初めて分析が開始されるものであり、先の3つの例に代表される事態は、周辺的な扱いを受けるか、あるいは分析する対象とは見なされてこなかったのである。言語学がこうした(感覚的・経験的)事実に対して、それからの「規範」や「正統からの逸脱」、さらには「裏切り」といった価値観やパラダイムで捉え続ける限りにおいては、こうした現象に対するコミュニケーション論的な潜在性を過小評価し、その動性を捉え損ねることになりかねない。これは正統的(authentic)な言語を目標とし、逸脱やそれからの墮落をよしとしてこなかった、従来の典型的な「言語(英語)教育観」に対しても根本的な問題を提示する。

本論考では、このようなコミュニケーションを広義に捉えた新たなコミュニケーション論を便宜的に「次世代コミュニケーション」と呼ぶこととする。それでは、こうした「コミュニケーション」の現実を分析、研究する際、どういったアプローチが可能であろうか。ここで新たな理論構築にあたり、サイバネティックス理論等においてコミュニケーションの視点か



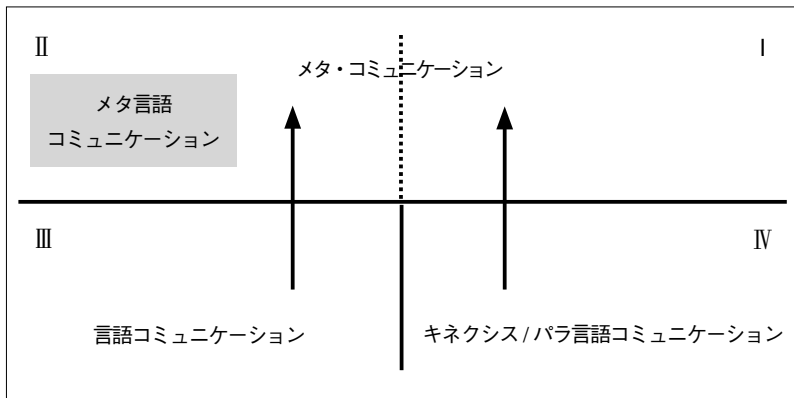
ら深い洞察を行った哲学者 Bateson<sup>18</sup> の思索を取り上げ、これを援用することで、既存の言語コミュニケーション論からの拡張、発展を試みることにしたい。

Bateson (1972=2000: 550) は、ヒトの進化の過程において、もし「コトバ」というものが、それまで「キネクシス(体部の動き)」や「パラ言語(非言語的発声)」が果たしていたコミュニケーションの機能を新たに担う(取って代える)ものとして登場したのであれば、キネクシスやパラ言語といった古いアイコン的システムは著しく退化しているはずであるが、実際はそうなっていないことを指摘した。事実としてこれらを用いた広義のコミュニケーション活動は精緻化されダンスや音楽や詩となり(563)、決して私たちの日常からは消え去っていないのである。Bateson の一連の議論が示唆することは、日常のコミュニケーション活動が、短絡的に「言語+非言語」であり、これら双方が補完し合いながら成り立つ類のものではなく、実はこれらが全くカテゴリーを違え(論理階梯を異にし)、人間の言語のシステムが、身振りやトーンによるアイコン(類像)性の強いシステムから単純に派生したものではない(550)ことを示しているのである。

さらに Bateson は、言語の発展とキネクシス・パラ言語の発展とが同時並行的に起こったということが、言語によるコミュニケーションとアイコンによるコミュニケーションがそもそも互いに異なった機能を担い、アイコンによるコミュニケーションが果たしている役割をコトバはうまく肩代わりすることができないことを主張した(551)。この論点は「言語の限界」を認識し、多感覚メディアによる融合的表現をコミュニケーションとしてとらえるべきだとする本論考の主張とも一致する。つまりコミュニケーションとして、言語活動、ひいては言語(英語)教育を議論する際、その概念モデルとして、まず言語があり、それに付随して非言語が付加される、あるいは補完するといった発想は捨て去るべきなのである。つまり、コミュニケーション活動においては、「言語=中心」、「非言語=周辺」という考え方は、日常の感覚としても、そして理論的にも正当とは言えないのである。したがってコミュニケーションを無理矢理に「(拡張的な)メタ言語」のくく

りて分析するのではなく、これらが互いに全く別次元のクラスでの表現であると捉え<sup>19</sup>、広義の「メタ・コミュニケーション」のレベルで分析する必要が出てくる。こうした枠組みは新たなコミュニケーション・メカニズムのモデル化に新たな一石を投じることになろう。ここで議論を整理するために、以下に概念モデルを図示する。なお本論考が用いる「メタ」とは、デノテーション(字義的;直示的)な意味ではない、コミュニケーション上の「第一の意味(Davidson)」を言い換えたものと定義しておく。

図1は、言語/非言語コミュニケーションをメタ・コミュニケーションの分析概念を導入し図式化したものである。ここでは第I・II象限のクラスをメタ・コミュニケーションの領域とした上で、その一部(第II象限)に「メタ言語コミュニケーション」が存在する構図としている。



(筆者作成)

図1 次世代コミュニケーション論の分析フレームワークの提示

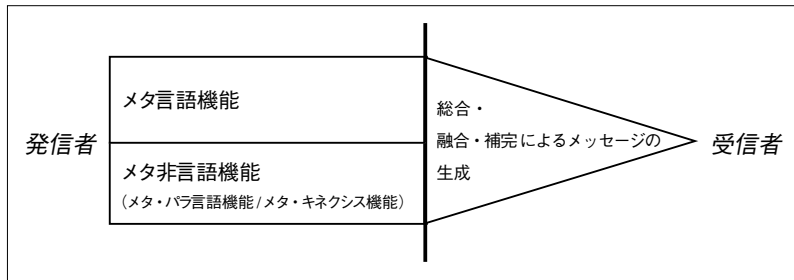
上記の分析枠組みを用いることによって先の「言語の限界」と「コミュニケーション」の関係の問題に一定の解決を与えることができる。伝統的に言語学の主流であった学派、例えば理想的な話者-聴者のみを自身の研究の対象とした Chomsky 派の統語論や、構造主義言語学以前の統語論、意

味論、形態論等のスタンスに代表される「言語(コミュニケーション)」の対象は、あくまで第Ⅲ象限に限ったものであり、字義的な言語現象を「規範的(prescriptive)」にとらえることのみで終始してきたと言ってよいだろう。またこれに対して、それらの「使用」の部分を実際のコミュニケーションの中での「メタ言語機能」や「推論」、「(間接)発話行為(Austin 1962, Searle 1975)」や「関連性」といった概念を用い扱ってきたのが、社会言語学の一部や語用論等の分野であり、第Ⅱ象限で扱ってきた議論であると言えよう<sup>20</sup>。しかし先に挙げた言語学が解決できない問題の各々は、この図でいう第Ⅰ象限で成り立っている(と思われる)コミュニケーション(ダンスや絵画によるメッセージ、喧嘩の「ふり」や動物の発声等)であり、それは第Ⅳ象限のメタ現象である。

この図が強調する点は、第Ⅲ象限にある「言語」の部分と、第Ⅳ象限にある、いわゆる「非言語」の部分に明確な境界線を設け、非言語が言語の延長であったり、その逆であったりするような、つまりどちらかがどちらかの「補助」であり、「置き換え」られるようなものではないことを示していることである。つまり言語で表現できないものは必ずあり、非言語領域においてもそれは同様である。互いに表現する内容がオーバーラップすることもあれば、協働して表現することもあろう。しかしながら、メタ・コミュニケーションレベルでは、第Ⅲ象限と第Ⅳ象限「それぞれ」の領域で別々にメタレベルでのメッセージを持ちうるわけであり、例えば第Ⅲ象限の内容は、メタレベルで第Ⅰ象限のコミュニケーションを説明することができない。これが「言語の限界」であり、コミュニケーションを研究する限りにおいて、そしてこれらの応用の一つとしての「言語教育」を研究・実践する限りにおいて、研究者が考えなければならない重要な論点である。つまり第Ⅲ象限のみ、あるいは第Ⅱ象限における領域をも含めた「言語コミュニケーション」のみの研究や教育が「仮に」充実していたとしても、それは「コミュニケーション」を矮小化した教育や研究でしかない。また無理にメタ・コミュニケーションの一部であるメタ言語の分析枠組みを無理やり拡張して適用しようとしても、つまり、第Ⅱ象限での分析ツールを、

直接的に第I象限に適用・応用させようとしても、そこには無理があるのである。Davidson や Bateson がこうした問題概念でコミュニケーションをとらえていたかどうかは定かではない。しかしこうして「メタ・コミュニケーション」と「言語」の関係を整理することで、彼等が問題として提起した事象を一定の形で提示することができたと言えるのではないだろうか。

上記の議論を踏まえた上で、メタ・コミュニケーションのレベルでの「発信者」と「受信者」はどういった機能を用い、それらを総合・融合・補完し、コミュニケーションとして成り立たせているのだろうか。以下の概念図(図2)は、メタ・コミュニケーション領域でのコミュニケーションのメカニズムを模式化したものである。この図が説明することは、メタ・コミュニケーションにおける言語機能、すなわち「メタ言語機能」とは、コミュニケーションのあくまで一部をなすものであり、それとは独立して別に考えるべき要素(メタ非言語機能[メタ・パラ言語機能/メタ・キネクス機能])が存在することである<sup>21</sup>。



(筆者作成)

図2 コミュニケーション(メタ・コミュニケーションレベルでのメカニズム)の模式図

先に指摘したように、既存の言語論、特に語用論は、表層的に表れる言語のみでなく、コミュニケーションや推論としての機能を説明するメタ言語の分析も同様に行ってきた。Sperber(1994)は、4次のメタ言語機能が私たちの言語活動にあると指摘し、日常のコミュニケーションの複雑さを指

摘することで、コミュニケーションの解明に大きな貢献をしている。新しいコミュニケーション論の理論的枠組みを考える際、ここで重要なことは、既存の言語論が果たしてきた「メタ言語的な分析」はそのまま利用・拡張が可能なことである。つまり、言語の限界を認めつつ、メタ言語の限界を認めた上で、表現メディアとして優れてその機能が分析されている言語論の分析枠組みを拡張し、提供することこそが、これからの言語学がなすべき有意義な貢献であると考えてるのである。

本章における理論的な提示、そしてその考察は未だ初期段階のレベルであり、この議論が実際のコミュニケーションの分析に十分に耐えられるだけの厳密さを持っているわけではない。しかしここまでの論考で、コミュニケーションという現象における「言語」や「メタ言語」的な機能の特定の、限定的な役割や、その限界に関して一定の示唆を与えることはできた。Jakobson (1976, 1996) が指摘するように、言語とは確かにそれ自体が「メタ言語機能」を持ち、コミュニケーションにおいては優れて効果的・効率的な表現手段である。このことに関して否定する余地はなく、誰もが納得することであろう。しかし万能ではないのである。メタ・コミュニケーションのレベルでは、我々は言語以外の質や次元の違った要素から、実に豊かで自然なやり取りを行っている。これらを言語が取って代わることはできない。

以上の議論が導く結論は、大学の英語教育において、それが「コミュニケーションを重視したもの」にしようとするのであれば、(例えば)その評価は言語のみに限定するべきではないということである。「言語の限界」を認識した言語教育は、その教育実践・評価の双方において、言語以外のメディアを積極的に活用した表現全体を対象とする必要がある。具体的にはコミュニケーションとして、まず伝える「内容」そのもの、またその構成や独自性への視点が考えられるだろう。そしてその内容を受信者に伝える際、いかにしてそれらをプレゼンテーションできるか、その際の実信者への効果的なアピール、メッセージが最終的に受信者に伝わったかどうかという「相互了解性 (mutual intelligibility)」の評価や、言語と非言語の補完・

協働関係による「メッセージ」の全体的 (holistic) な評価等を考えることができる。さらには相互行為におけるコミュニケーションに対する発信者の編集やそれに対する熱意をも含めた観点等を積極的に取り入れる実践や評価を早急に検討すべきである。そしてこれらの要素を「発信者」の視点のみではなく、「受信者」の視点をも取り入れた、つまりコミュニケーションにおけるメッセージ全体の「やりとり」が評価できる基準作りが必要である。

#### 4 おわりに

本論考は現在行われている英語教育やその評価実践について、これまでのあり方を根本的に改める必要性を含意している。当然狭義の言語能力を評価の一部に取り入れることに異論はない。しかしながら現実のコミュニケーションにおいては、言語は第一義的な伝達メディアの立場を退き、むしろ「脇役」に徹することも多々ある現実を認識し、教育も評価もそのあり方を抜本的に見直す時期に来ていることを強く訴えたいのである。コミュニケーションを重視した英語教育とは、「はじめに言語ありき」の価値観を再考するところから始まるとも言えよう。メタ・コミュニケーションにおけるコミュニケーションの分析という理論的基盤に基づいた外国語教育やその評価論は、既存の言語論が提示してきた言語教育のパラダイムに根本的な変革を求め、新たな言語観とそのための具体的方法論への議論を提示するであろう。

本論考が訴える対象は、あくまで大学英語の評価に携わる者、具体的には大学英語の授業担当者や、そのプログラムをオーガナイズすることに携わっている者に対してであった。しかしながら本論考の主張やその訴える内容は、必ずしも大学英語という狭い範囲のみにとどまるものではない。広く英語教育、言語教育、そして教育全般に携わる者に対して、本論考が何らかのメッセージを発し、示唆を与えることができたとすれば、筆者にとってこの上ない喜びである。

## 注

- 1 静他 (2002: 54) は、コミュニケーション能力の具体的な構成要素に関して、その代表的な複数の理論的枠組みを紹介しつつも、「研究者間で意見が異なる」としている。
- 2 意思の伝達において、言語コミュニケーションよりも非言語コミュニケーションに依存することの方が多しとする説は多方面から報告されている。Birdwhistell (1955) によれば、全体のコミュニケーションの中で言語の占める割合はわずか 35% にすぎず、残りの 65% は話し方、表情、ジェスチャー、動作等、言語以外の伝達手段が占めるとしている。また、Mehrabian (1968) によれば言語の占める割合はさらに減少し、純粋な言語要素である verbal はわずか 7% を占めるに過ぎないとしている。
- 3 Donald Davidson (1917-2003)
- 4 Willard Van Orman Quine (1908-2000)
- 5 Davidson (1984, 1986) の言語哲学を第二言語習得の議論に応用させることを試みた研究に柳瀬 (2001 草稿他) がある。Davidson は決して具体的な言語教育の方法論に言及したわけではなかったが、柳瀬は、彼の議論を第二言語習得論の文脈で理論として確立しようとしている。筆者による本論考も、この柳瀬の草稿を踏まえたものであり、多くの示唆を負っていることをここに付記しておく。
- 6 この発想は、会話の成立が常に暫定的であり、言葉の接続が「局所的 (local)」にしか管理されないという Sacks (1992) の論点と繋がっていると田中他 (1998: 51) は指摘している。
- 7 この「根源的解釈 (radical interpretation)」は、Quine (1960) の "radical translation" を受けて、彼独自の視点から議論を行ったものであり、Glock (2003) によれば、Quine のものとは哲学的な前提や目的が異なっているという。Davidson (1984) は「根源的解釈」を理論仮説として提示しているが、これは未知言語を理解しようとする時のみに当てはまるのではなく、日常の会話においても程度の差こそあれ、基本的には当てはまるとしている (柳瀬 草稿、田中 1998: 50)。
- 8 現行の英語教育評価論において、例えば TOEFL、TOEIC をはじめとした既存の評価モデルの統計的な精緻化、妥当性や信頼性の確保に対する研究の蓄積は膨大であり、その成果には目を見張るものがある。しかしながら 20 年後の言語 (英語) 教育において、これらの評価モデルが現在と同じだけの権威を持ち、コミュニケーションの評価モデルとしてどれだけ「当てにされている」のかを真剣に考えるべきではないか。こうした根本的な枠組みの変更を迫ること、あるいはその可能性を議論し、検討することも、言語学的な知見が果たすべき役割であると筆者は考えている。前章で指摘したように、概して欧米のコミュニケーション・モデルは既存の理論的フレームワークに固執しすぎる傾向がある。
- 9 Smith (2002=2003: 90) は、Tannen (1989) の研究を以下のように紹介している。「その心的イメージ論の外観的分析で、会話の流れの中の諸イメージから派生される信憑性・感情移入・親密感・美的快感の効果を論じ、現在の言語学の枠組みからはこうした効果を扱うことは無理であろうとする考えを述べている (下線は筆者)」。しかし Smith 自身の考えは (90) こうした議論は、言語学の枠組みを限定した場合のみに限って言えることであり (例えば統語論と音韻論等)、その「網を広げれば事情は異なる」とし、「言語学の限界」という主張に対して否定的に捉えている。
- 10 例を挙げると、Smith (2002=2003) は Savage-Rumbaugh 他 (1998) により「統語論を把握した」として記述・言及された「ニンジンに少し水を掛けなさい」に対するカンジの反応とその根拠付け (69) に対する議論がある。(実際にカンジはニンジンを外へ投げている。なぜなら外でその日は激しく雨が降っていた)。Smith はこうした説明は言語と言語の使用の区別を否定しており、語彙と常識に依存した反応であり、本当に統語論的な普遍文法原則を示

- したのかどうかを疑問視し、結論として一連のカンジの言語能力の記述と説明に対し、その正当性を大いに疑っている (2003: 118-126)。
- 11 ビジンやクレオールに対しては、その研究者の間ですら長い間「負の価値」を負わされてきた歴史を持つ。Jespersen は *Language*(1922) の中で、「Pidgins and Congenes」の章を設け、これらの言語は「混合語」ではなく、不完全に学習された言語である (232) と主張した。さらに Bloomfield は、*Language* (1933) の 26 章にて、ビジンやクレオールを「jargon」と呼び、現地人と白人の妥協の結果生まれたものであるとした (473)(Todd 1974=1986: 200 に引用)。
  - 12 現にカメルーンの首都ヤウンデ周辺で話される俗エウォンド語と呼ばれるビジンは、人里離れた地域では使われず、交易・行政等の接触が見られる場所に限るといことである (Alexandre 1962; Todd 1974=1986: 78)。
  - 13 ビジンやクレオールの「動性」については以下のことがとりわけ指摘できる。Hall (1966: 122-3) は「クレオール化」と関連付けられる類の(言語)変化は、ある種の歴史的データを見ると普通数千年かかると指摘した上で、「ビジン化」はほとんど「一晩にして」起こる可能性もあり、「クレオール化」すらもわずかたった3世代足らず、100年未満で成し遂げてしまう (Wardhaugh 1992=1994: 107)。この言語変化の驚くべき「速さ」は十分に強調されるべきであり、コミュニケーションの一つの特徴として示唆的である。
  - 14 さらに、メタレベルでのビジン化やクレオール化とも言える現象(若者による造語や Japanese English、「ポスト・クレオール連続体」と解釈できる教室言語、さらに広義には「メディア」や「コード」を自在に編集することによって生じる音楽や芸術に代表される「規範」からの「逸脱」現象等)についても同様の議論が展開できる。
  - 15 これには若者の「ら」抜きことば、敬語の逸脱や若者独自のボライトネス理論、絵文字やギャル文字の「コード」の使用や、その拡張的使用まで多くのテーマや題材を含んでいる。
  - 16 佐藤 (2002: 98) は、自身がテーマとした暴走族のエスノグラフィーの中で、グループに見られる大きな一つの特徴として、「多蘭蝶羅」「薔薇鬼」「綺羅」等に見られるように当て字や画数の多い漢字を使用したグループ名に見られるような、一見極めて奇妙で奇抜なシンボルの使用を挙げている。佐藤自身はこれらを象徴人類学(文化人類学)やシンボリック相互作用論(社会学)を参考として論じたとしているが、これは言語とコミュニケーションの研究の題材としても興味深い。この場合、これらの「言語」そのものの「意味」にももちろん一定の意味合いがあるだろうが、それとは別の「領域」での「(別の)意味」が考えられるからである。
  - 17 これらについては、かつて Jakobson (1976; 1996) が言語機能の一部としての「詩的機能」として提示し、池上 (1984) がこれを「美的機能」として拡張して論じたことがある。しかしながら、これらはいずれも言語機能の(あくまで)一部としての言及であり、我々に審美的な感覚を抱かせるコミュニケーション機能について正面から分析したものではないし、言語の範疇にとどまった議論でしかない。
  - 18 Gregory Bateson (1904-1980)
  - 19 Bateson は、これを「一次過程」、「二次過程」いう概念枠組みを用いて二分化し、それぞれの区別を与えている(詳細は Bateson (1972) 参照)。また、Bateson の発想の原点でもある論理階梯を異にすることを議論した哲学は、Korzybski (1933) によって提唱され、後に Hayakawa (1941) 等によって一般に知られることとなる「地図」と「現地(土地)」のメタファーに象徴されている。これは本論考では図1の第I、第II象限が「地図」のレベルに相当し、第III、第IV象限が「現地(土地)」のレベルに相当することを意味し、論理レベルの相違という考えは本論考においても重要な理論的根拠である。
  - 20 厳密な意味でこの「語用論」という概念に相当するものとは言えないが、Pinker (1994) の「心的言語 (mentalese)」という考え方も、メタ的な言語機能に言及しているとも考えられる(≒思考の言語)。しかしいづれにせよ、メタ的な領域が言語によって説明されているロジック



- には変わりはなく、言語化されない思考やコミュニケーションの領域までも説明できる概念だとは言えない。
- 21 これに付加される形で新たな要素が導入されたり、既存のものが新たに統合されたりする可能性は大いにありうる。仮説的に列挙すれば、「審美的機能」や「メタ状況認知機能（共有感覚、世界知識へのアピール等）」といったものが挙げられるかもしれない。つまりメタ・コミュニケーションの領域は、「メタ言語要素」と「メタ非言語要素（メタ・パラ言語、メタ・キネクシス）」のみによって成り立つとは限らない可能性がある。

## 参考文献

- 池上嘉彦 1984『記号論への招待』岩波書店
- 石井敏 2001「異文化間コミュニケーション能力とは何か：構造と構成要素のモデル化の試み」『獨協大学外国語教育研究』第19号所収
- 金谷憲他編 2003『英語教育評価論：英語教育における評価行動を科学する』河源地社
- 佐藤郁哉 2002『フィールドワークの技法：問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社
- 静哲人他 2002『外国語教育リサーチとテストングの基礎概念』関西大学出版部
- 鈴木孝夫 1999『日本人はなぜ英語ができないか』岩波書店
- 鈴木佑治 2003『英語教育のグランド・デザイン』慶應義塾大学出版会
- 田中茂範、深谷昌弘 1998『〈意味づけ論〉の展開』紀伊国屋書店
- 戸田山和久 2002「真理条件的意味論と検証条件的意味論」『言語哲学を学ぶ人のために』野本和幸他編 世界思想社 pp.104-121
- 柳瀬陽介 2001「デイヴィッドソンのコミュニケーション能力論からのグローバル・エラー再考」『教育学研究紀要』第47巻第一部 中国四国教育学会編 pp.55-60
- 柳瀬陽介 2001「コミュニケーション能力論に対するデイヴィッドソンの貢献」(草稿)  
<http://ha2.seikyou.ne.jp/home/yanase/GlobalError.html>
- 山中司 2006『コミュニケーションを重視した大学英语教育における発信能力の評価：基礎研究と評価モデルの提案』2005年度慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科優秀修士論文 慶應義塾大学湘南藤沢学会
- Austin, J.L. 1962 *How to Do Things with Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Bachman, L. F. 1990 *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press. (大友賢二他訳 1997『言語テスト法の基礎』C.S.L. 学習評価研究所)
- Bachman, L.F. & A.S. Palmer 1996 *Language Testing in Practice*. Oxford: Oxford University Press. (大友賢二他訳 2000『実践』言語テスト作成法』大修館書店)
- Bateson, G. 1972 *Steps To An Ecology of Mind*. Balantine: New York. (佐藤良明訳 2000『精神の生態学』改訂第2版 新思索社)
- Birdwhistell, R. 1955 "Background to kinesics." *ETC* 13. pp.10 - 18
- Bloomfield, L. 1933 *Language*. New York: Holt.
- Canale, M. & M. Swain 1980 "Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing." In *Applied Linguistics* 1 no.1.
- Canale, M. 1983 "From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy." In J.C. Richards and R.W. Schmidt ed. *Language and Communication*. London: Longman. pp.2 - 27
- Chomsky, N. 2000 *New Horizons in the Study of Language and Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Davidson, D. 1984 *Inquiries into Truth and Interpretation*. Oxford: Oxford University Press. (野本和幸他訳 1991『真理と解釈』勁草書房)
- Davidson, D. 1986 "A nice derangement of epitaphs." In E. Lepore ed. *Truth and Interpretation*. Oxford: Blackwell. pp.433 - 446
- Glock, H.J. 2003 *Quine and Davidson on Language, Thought and Reality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grice, H.P. 1989 *Studies in the Way of Words*. Cambridge, M.A.: Harvard University Press. (清塚邦彦訳 1998『論理と会話』勁草書房)
- Hall, R.A. 1966 *Pidgin and Creole Languages*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Hayakawa, S.I. 1941 *Language in Action*. New York: Harcourt, Brace.
- Hymes, D. 1967 "Models of the Interaction of Language and Social Setting." *Journal of Social Issues* 23. pp.8 - 28
- Hymes, D. 1972 "On Communicative Competence." In Pride & Holmes ed. *Sociolinguistics*. Harmondsworth: Penguin.
- Jakobson, R. 1976, 1996 *On Language*. Linda W. Waugh and Monique Monville Burton Ed. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Jespersen, O. 1922 *Language*. London: Allen & Unwin.
- Korzybski, A. 1933 *Science and Sanity: An Introduction to Non-Aristotelian Systems and General Semantics*. Lancaster, PA: Science Press.
- Mehrabian, A. 1968 "Communication without words." *Psychology Today* 2 (9). pp.52 - 55
- McNamara, T.F. 1996 *Measuring Second Language Performance*. London: Addison-Wesley Longman.
- McNamara, T.F. 1997 'Interaction' in second language performance assessment: Whose performance? *Applied Linguistics*, Vol.18, No.4
- Pinker, S. 1994 *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. New York: Wm. Morrow.
- Quine, W.V. 1960 *Word and Object*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Rossi, P.H., M.W. Lipsey & H.E. Freeman 2004 *Evaluation: A Systematic Approach, Seventh Edition*. Sage Publications. Thousand Oaks, CA. (大島巖他監訳 2005『プログラム評価の理論と方法』)
- Sacks, H. 1992 "Lectures on Conversation." In G. Jefferson Ed. *Lectures on Conversation* 1. (Harvey Sacks). Cambridge. M.A.: Blackwell.
- Sanjek, R. 1991 "The Ethnographic Present" *Man*(n.s.)26. pp.609 - 628
- Savage-Rumbaugh, S. et al. 1998 *Apes, Language, and the Human Mind*. Oxford University Press.
- Searle, J. 1975 'Indirect Speech Acts', in Peter Cole and Jerry L. Morgan Ed. *Syntax and Semantics Volume 3: Speech Acts*. Academic Press. pp.59 - 82
- Smith, N. 2002 *Language, Bananas & Bonobos*. Oxford: Blackwell. (今井邦彦訳 2003『ことばから心をみる』岩波書店)
- Sperber, D. 1994 In J. Khalfa ed. *What Is Intellegence?* Cambridge University Press. pp.179 - 98
- Sperber, D. & D. Wilson 1995 *Relevance*. 2nd edn. Blackwell.
- Tannen, D. 1989 *Talking Voices*. Cambridge University Press.
- Todd, L. 1974 *Pidgins and Creoles*. Routledge & Kegan Paul. (田中幸子訳 1986『ビジン・クレオール入門』大修館書店)
- Wardhaugh, R. 1992 *An Introduction to Sociolinguistics*. Second Edition. Basil Blackwell. (田部滋他訳 1994『社会言語学入門』リーベル出版)

[2006.10.10 受理]

[2007. 3. 7 採録]